

(トップページ：<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(サウジアラビア：<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html>)

(「写真は語る」シリーズ：<http://members3.icom.home.ne.jp/3632asdm/PhotoEssay.html>)

マイライブラリー：0184

2011.6.7

前田 高行

写真は語るシリーズ：独裁者の駆け込み寺サウジアラビア



二人の独裁者

上の写真は左がチュニジアのベン・アリ前大統領、右がイエメンのサーレハ現大統領である。ベン・アリはチュニジアの独裁者として23年にわたり君臨していたが今年1月に失脚した。一方のサーレハは1978年に権力を握りベン・アリを上回る33年の間権力を維持し今も大統領の地位にある。但し今彼は国内の反政府勢力から激しい攻撃を受け、米国やGCCなどからも退陣を迫られて風前の灯である。

二人に共通しているのは共に現在サウジアラビアにいるということである。二人の違いは、ベン・アリが亡命者としてジェッダで失意の日々を送っているのに対し、サーレハは反政府勢力のロケット砲撃により負傷し、治療のためリヤドの病院にいるということである。

ベン・アリは行商青年の焼身自殺に始まった暴動を当初は武力で鎮圧しようとしたが、これが裏目に出て1月12日に家族と腹心の部下を伴い行き先の当ても無いまま飛行機で脱出した。地中海のマルタ上空で旧宗主国のフランスに亡命を求めたがサルコジ大統領に拒否され、最後は漸くサウジアラビアが受け入れたのである¹。

サーレハの場合は本人の退陣とその見返りとして在職中の罪を問わないとする非訴追権を骨子とするGCC調停案の署名を三度も土壇場でキャンセルした。その結果、反政府軍から攻撃を受け負傷したのである。調停案を反故にされメンツをつぶされたサウジアラビアではあったが、同国はサーレハにリヤドの病院での治療を提案、特別機を差し向けた²。

サウジは独裁者の駆け込み寺

亡命と治療の違いはあるにしろサウジアラビアがイスラム国家の独裁者を受け入れるのはこれが初めてではない。1979年には悪名高いアフリカ・ウガンダのアミン大統領(当時)の亡命を受け入れた。さらに1999年にはパキスタンの軍事クーデタで追われたシャリフ首相(当時)がサウジアラビアに亡命した。2009年にはナイジェリアのヤラドゥア大統領(当時)が重い心臓病のた

めサウジアラビアの病院で手術をおこなっている³（同大統領は術後帰国したがまもなく死亡）。その他高名な聖職者が庇護を求めてきた例もある。サウジアラビアの対応はまさに「窮鳥懐に入らば獵師もこれを撃たず」を地で行くものであり、同国は失脚した独裁者にとって「駆け込み寺」とでも言うべき存在である。

サウジアラビア政府はこのような対応をイスラムの助け合いの精神によるものと説明している。キリスト教、イスラム教を問わず宗教の世界では互助の精神が広く浸透しているが、特にイスラム圏ではサウジアラビアやイランのように宗教と政治が一体化している国が多く、そのため社会のシステムに互助精神がビルト・インされていることが特徴である。また厳しい自然環境で生きてきたサウジアラビアのベドウィンには砂漠で道に迷った旅行者や病者を手厚く保護することはお互い様という感覚があることも、サウジアラビアが「駆け込み寺」になっている理由と言える。

ただしサウジアラビア政府は亡命者を受け入れる際、彼らに対してサウジアラビア滞在中は一切政治活動やそれに類する言論活動をしないことを誓約させている。この点はイランのホメイニ師が亡命先のパリで反政府活動を展開したケースとは亡命の意味が異なっている。サウジアラビア政府は相手国政府との間で将来問題を起こさないよう予防措置をとっており、相手国政府に対しても敵敵の口を封じ、返り咲きを阻止できるという意味で、亡命者がサウジアラビアに落ち着くことはむしろ穏便に厄介払いできるメリットがあると言えよう。事実、サウジアラビア亡命後に相手国政府が身柄引き渡しを求めることはない。

実はエジプトのムバラク大統領の失脚直後も、サウジアラビアは病気治療を兼ねて来訪するよう彼に提案している⁴。しかし彼はエジプト国内にとどまり、病気と裁判というどちらに転んでも明るい見通しのない、いわば塙の上を歩いている状況である。彼が何故サウジアラビアの申し出を受けなかったのか、その真相は不明である。

カダフィはサウジに亡命するか？

MENAにはもう一人亡命予備軍がいる。リビアのカダフィ大佐である。彼は敬虔なイスラム教徒(ムスリム)である。そしてイスラムの国サウジアラビアは慈悲の心でムスリム亡命者を受け入れる。本稿の論旨を敷衍すればサウジアラビアはカダフィの亡命候補先の一つと考えることができる。

しかしカダフィとサウジアラビアの間に目に見えない大きな障壁がある。カダフィは40数年前に当時のイドリス王朝を倒しリビアを民主国家に変えた。彼の言う民主主義とは人民が直接統治する「ジャマヒリーヤ体制」であり、そこには大統領も首相も大臣もない。だから彼自身も未だにクーデタ時の肩書である「大佐」を名乗っている。しかしそのような観念的な体制で実際の国家は動かない。結局彼一人に全ての権限が集中し、彼は自己陶醉型の独裁者となった。そのようなカダフィが絶対王制国家のサウジアラビアの庇護のもとでおとなしく暮らせる訳がない。彼にとってサウジアラビアは最も住みたくない国の一つであろう。

かたやサウジアラビアにとってもカダフィは歓迎すべからざる人物である。特にアブダラー国王はカダフィに対して激しい嫌悪感を持っていると思われる。2003年のアラブ・サミット

でカダフィは当時皇太子であったアブダッラーに対してサウジアラビアが欧米の手先であると口を極めてののしった。そして6年後にカタールのドーハで開かれたサミットでも、カダフィはこの問題を蒸し返した上、アブダッラー国王の個人的な攻撃を行った。日頃は温厚なアブダッラー国王もさすがに堪忍袋の緒が切れ、二人は他のアラブ諸国の代表の目の前で掴みかからんばかりの喧嘩沙汰を起こしたのである⁵。

敬虔なムスリムであるカダフィはほぼ毎年聖地マッカに巡礼している。サウジアラビアはテロリスト以外であればわけ隔てなく巡礼者を受け入れるのが大原則であり、たとえカダフィであろうとも例外ではない。そして他国の元首が巡礼で訪れた場合、慣例として国王は国家元首と挨拶を交わすことになっているが、国王はカダフィとだけは顔を合わさない。二人は犬猿の仲である。カダフィがサウジアラビアに亡命を求めるとはとても思えない。

万一彼が亡命を求めた場合アブダッラー国王がどう判断するかが見ものである。その場合、筆者は国王が恩讐を越えて彼を受け入れるような気がする。イスラムの守護者を自任するサウジアラビア王国の君主としての度量の見せどころだから-----。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ Arab News on 2011.1.16, 'Ben Ali arrives in Saudi Arabia'

<http://arabnews.com/saudiarabia/article235049.ece>

² Arab News on 2011/6/5, 'Saleh now in Riyadh for treatment; VP is acting president',

<http://arabnews.com/middleeast/article448365.ece>

³ Arab News on 2010/1/23, 'Yar 'Adua's fate hangs in balance',

<http://www.arabnews.com/?page=4§ion=0&article=131698&d=23&m=1&y=2010>

⁴ Gulf Times on 2011/2/17, 'Mubarak given up, wants to die in Sharm',

http://www.gulf-times.com/site/topics/article.asp?cu_no=2&item_no=416690&version=1&template_id=57&parent_id=56

⁵ Kuwait Times on 2009/3/31, 'Sparks fly at Arab summit'

http://www.kuwaittimes.net/read_news.php?newsid=MjI5NjI2MTE4